

## 小野寺氏の講演 「講演より再構成」

### すばらしい歌津を作る協議会会長

#### ●初めに

震災から1年3ヶ月、今までは目に見える形で被害の状況がここにもあそこにも見えていたが、目に見えないところで被害の重さが一人一人の被災者の心の中にのしかかっていると見える。被災者は、大切な家族や友人を失っている。

震災後地域の指導者として信頼されていた方が自殺をしてしまった。人はどんなに親しい間柄であっても、尊敬する間柄であっても、最後の最後には一言も打ち明けることが出来ない悩みのあることを痛切に感じている。そして、残された友人たちは彼の力になれなかったことを今でも悔いている。

人は極限状態になると泣けない。避難所では泣きたくても泣けない、一年間我慢してきている。孫や子どもがいる前で、狭い中で年をとった人たちは泣けない。どうするかというと笑う。しかし本心から笑っているわけではなく、笑ってごまかしている。

#### ●三陸の歴史は津波の歴史でもある

昨年三陸町を襲った津波は低いところで15メートル、高いところでは21メートルにも及んだ。この地域の歴史は津波の歴史であり、過去に幾度となく津波の被害を受けている。津波の歴史は弥生時代にもたらされた稲作の歴史でもあると言われている。稲作に適しか土地を求めて人々は平野郎に移り住むようになった。水田を確保するために海岸の湿地や沼地を埋め立てもした。

巨大津波は、今から1143年前の貴報11年に、それ以前には弥生時代にもあったことが分かっている。約1000年に一度の頻度であった。

近世に於いては、明治29年には歌津地区だけで799人、昭和8年には86人、昭和35年のチリ地震の時には志津川で41人の犠牲者が出るなど、大小はあるが20～30年に一度の割合で津波災害を被ってきた。

地震がないのに一夜にして村が全滅した、神隠しにあったとの記録は地球の裏側からの津波の来襲であったことが双方の記録を付き合わせた結果明らかになっている。

#### ●過去の津波災害の教訓が活かされていなかった悔しさ

南三陸町は志津川と歌津両町が合併した町であるが、その知名度は低かった。今回の大津波によって、行政の機能が失われた中でどう復興がなされるのか注目を集める事となり、世界の南三陸町になってしまった。

合併後に町役場となったのが志津川である。その場所はチリ津波の時にも被災し、住民情報を初めとして多くのデーターを失った苦い経験を味わったのである。それにもかかわら

ず過去の被災が教訓として生かされなかった。

今回の津波により、国道沿いの商店はことごとく流されてしまった。残ったのはわずか2軒であった。津波が来れば困ったことになる、予想はしていたが対策は何一つなされていなかった。

人が作ったものでは災害を防ぐことが出来ないことも分かったと言える。

### ●地名や伝承から学ぶ（防災教育に先人の残しか智慧をどう伝えてゆくのか）

志津川の海岸から7キロ以上奥に標高400メートルの『三人立』という、大昔津波が来たときにこの山に登って3人が助かったという伝承のある山がある。

このふもとは『船くぼ』『船河厚』『大船』『タコ座』『残り屋』などの津波にまつわる地名も残されている。『塩人』『汐見』『中瀬』などの地名もある。

この津波伝説を誰も信じなかったが、600年前に海だったところには今回の津波が行っている。縄文時代はもっと奥まで海だったとされる。今回の津波であれば伝承の地まで津波は到達すると考えられる。

地名や伝承は歴史の化石である。過去の災害を知る上で、文字にとらわれることなくいろいろな角度から検証し解釈をする必要がおる。

### ●情報をいかに伝達するか

避難所にいると身近な情報が全くない状況になってしまった。1ヶ月間停電していた、水は8月になってから。

この状況の中では、自分と同じ集落の人たちがどこに行ったのかも分からない。他にはどこに避難所があるのか、誰がどこにいるのか等全く分からない。分からないことが新たな不安を呼び起こしてしまう。誰かが身近な情報を届ける必要を感じた。

このため自ら情報紙『一燈』を作り不安の解消に努めた。昨年4月17日に第1号を発行するに至ったが、地域の身近な情報伝達は不可欠である。

また、この情報紙によって、新たな支援の輪も国内に広がることになった。支援が支援を呼ぶという状況が起きた。

情報がいかに重要かを感じる。

### ●仮設住宅の問題点：

仮設住宅入居に当たって、阪神淡路大震災で孤独死や自殺が相次いだこともあり集落単位での入居を訴えたが聞き入れられずに希望者全員の抽選となった。このため新たなコミュニティを作らなくてはならなくなった。震災以前のコミュニティも今後の復興に向けて維持しなくてはならないため、被災者には大きな負担である。

住宅の大きさは2LDKが主流であり、大人4人の家族がそろって暮らすためには極めて狭い、プレハブを建て増ししたいと希望しても許可されない。個々の状況にもう少し配

慮が必要である。やむなく仮設を出て、危険は承知で海岸近くに自らプレハブを建てての仮住まいを余儀なくされることも起きている。

また、集落の高台移転についての相談をしようにも、あちらこちらの仮設住宅に散らばって入居どなったため、誰がどこにいるのか名簿を作るだけでも大変、連絡をするだけでも大変、集まる場所をどうするか等の問題が出てきてしまった。今後の復興に向けて大きな支障を来すことが憂慮される。

### ●被災地支援の問題

従前より、津波の時には山間部の人たちが、山間部で災害が起きた時には海側の人たちがそれぞれ助けるという了解事項があった。

この了解事項に基づき当日午後4時には炊き出しの準備が始まり、当日だけで700個のおにぎりを炊き出した。おにぎりや豚汁、たら汁の炊き出しは4日間続けられた。

あとで分かったことだが、700人の所に500個のおにぎりではケンカにかかるので配れない。700個になるまで待っていたという。

2日後には山を越えてパンと牛乳が届けられたが、数が足りなくて配ることが出来ず、おにぎりと組み合わせで配ったという。海岸沿いの国道は寸断され、山を越えて入る国道1本となってしまった。支援物資を届けようにも道路事情が劣悪のため賞味期限切れとなってやむなく廃棄されたものもあった。

本格的な救援は、アメリカ軍がヘリコプターで来だのが5日目、自衛隊が本格的な炊き出しに入ったのが3月19日だった。桐生の災害ボランティアが炊き出しに来だのは3月26日、民間の桐生がいかに早かったか。

役場の職員が正式に調査に来だのが3月19日、一週間過ぎてからであった。役場も壊滅し無政府状態になっていた。

災害が発生した時地域の中でいかに助け合えるかを、平常時に作っておく必要がある。災害を想定し、いかに助け合うかを具体的に検討しておかないと、いざという時になんの役にも立たない。

併せて、被災時にどの様に支援を受けるのか、支援を受ける力『受援力』がこの震災で試されている。受け皿がないために支援したくてもできない人が沢山いるように感じる。せっかく支援したお金が生かされていない等。受援力とはつまり、地域力・組織力・政治力・危機管理能力そういうものにも置き換えることが出来る。常日頃どの様な組織を運営してきたのか、どの様な地域を作ってきたのか。それが、災害が起きた時に、皆さんの支援を受けながら立ち直ってゆくことにつながるものである。

### ●災害ボランティアとの交流

震災後、多くのボランティアが訪れる中、ただ黙々と作業をし、一言も交わさずに帰ってしまう姿があった。被災者にしても一言でもお礼を言いたい思いはあった。せっかく来

てくれたボランティアにとっても満たされない思いを抱いていることが分かり、被災者とボランティアの交流を図ることに勤め、出来るだけ仮設住宅や浜に案内をすることにした。

これはボランティアのみならず、被災者にとっても言葉を交わすことが大きな励みになるものである。

### ●復興に向けての精神的第一歩

避難生活の中で、寒さのため風邪が流行ってしまった。国境なき医師団、奈良の医師会、山梨学院大等の医師のお世話をいただいた。その後奈良の十津川村が水害に遭ったことから、地元の開業医が義援金の募金を始めた。奈良県の医師にお世話になった人が多く、少しでもお返しをしたいとの思いからである。

これが歌津地区全体の募金活動となった。

これが歌津地区復興への精神的第一歩になった。お世話になった人たちのために自分達の出来る事をしたいという被災者の思いが形になって表れたものである。これでこの地区は復興できると確信をした。

アフリカのエイズで苦しんでいる子ども達に布草履を作って送る運動も姑まっている。腕が上がって売れるようになったら売るのも良いが、まずは困っている人のためになることをしたいとの思いである。

### ●今後復興へ向けての取り組み

今、東京直下型を初めとして震災が取りざたされている。人ごとではなくなってしまった。私たちがどのような取り組みをしてきたのか視察も来ている。

行ったら迷惑にならないかなど心配せずに、まずは自分の目で被災地を見、自分の耳で被災者の声を聞いてもらいたい。そこから、自分は何をしなければならないのか、自分の地域では何をしなければならないのかを自分の地域に置き換えての防災対策をして欲しい。反面教師として私たちの地域を使ってもらいたい。

皆さんが来ることによって、ホテルも使ってもらえるし、復興商店街で買い物をしてもらえる事になるであろう。復興した後には、お互いにプラスになるような交流になることを願っている。

3月には社団法人『町作り機構（町作り会社）』を立ち上げ、大学の先生方や、企業の支援を受け、行政では出来ないことに取り組み少しでも復興につなげようとしている。

### ●災害に備える心を

日本列島は災害列島である、いつどこでどの様な災害に遭遇するか分からない。海に行った場合には何時津波が来ても良いように心構えを特って対処してもらいたい。

もし津波が来たらどこに逃げる、どの様にしたら一番短い時間で逃げられるのか。つまり、車を止める方向を頭からではなく、直ぐに出られるような方向に止める。前に障害物

はないのか。どこの山にどの道を通っていけるのか。

今回、何人の人が渋滞に巻き込まれて、あるいは津波が来ているのにもかかわらず海に向かって走っていて流されたことか。決して人ごとではない。

被災地を見る時には同情ではなく、自分のこととして反面教師として自分が住んでいる地域で災害が発生した時どの様にしたらよいのかを、常に考えてもらいたい。

そして、多くの被災者と言葉を交わしてもらいたい。話を聞くだけでも、一緒に泣くだけでも良い。笑うだけでも良い。

### ●復興に向けて

南三陸町では、まさに復興に向けての第一歩を踏み出そうとしているところだが、リーダーを初め被災者は疲れ切っている。ボディブローが日に日に効いてきている状態である。気持ちの持ちようをどの様にしたらよいのか迷っている。

このような悲惨な状況の中で、どの様な心の置吉方をしたら良いのか。先が見えない中で、どの様にしたらよいのかを示唆してくれるのが宗教界の方々と思う。この混沌とした状況下で仏教界（会）の方々に期待するところが非常に大きい。

今までの支援に感謝するとともに、今後いつまで続くか分からないが一年に一回でも良いから「元気か」と声を掛けていただくことが何よりの支援である。今後とも皆さんの支援を切にお願いするものです。

### 追加

●今後どの様な支援が出来るのかを調査した。

- ①地域の特産品（ワカメを初めとした海産物）の斡旋や購入。
- ②支援企業等とタイアップしてのグッズの製作。特に塩害杉を利用したキーホルダーなどが既に作成されている。寺院用のグッズ作成の可能性。
- ③寺院関係者からも愚痴を聞いてもらいたいとの声。
- ④3月11日を中心として昨年の津波などの様子が盛んにテレビで放映されたために、フラッシュバック状態になった人がいたことも分かった。

●今回のレポートは、被災地の生の声であります。歌津地区復興に向けて中心的存在、リーダーである小野寺氏の講演を基に再構成したものです。